静岡英和学院大学における英語教育：学生の主体的な学びを推し測るツールの開発

English Education at Shizuoka Eiwa Gakuin University: To Develop Students' Self-directed Study

第１研究者：遠　藤　雪　枝
共同研究者：パトリック・ハリントン、小　林　愛　明

１．はじめに

英語でコミュニケーションがとれる人を育成することが求められて久しい。本学人間社会学科のアドミッションポリシー①「英語」については、特に、「グローバル社会の人々とコミュニケーションを図るために、相手の話を理解し、かつ自分の意見を適切に伝えることができる能力を身につけていることを希望している」と明記されている。また、ディプロマポリシーにも「２．（技能・能力）国際化、情報化、高度技術化が進む現代社会を総合的に捉える適切な判断力、実践力、コミュニケーション方法を身につけている」とある。これはグローバルスタンダードに対応するためのポリシーだが、英語教育の必要最低限の目標を提示したに過ぎず、実際に教育活用するためにはさらなる具体化と精密化が必要である。

本学の英語の授業は習熟度別になっているが、授業実践方法や使用テキストに関しては各担当教員に委ねられており、一貫性がなく、本学独自の指針もない。例えば習熟度の下位クラスで使用されている教材が習熟度の上位クラス（または中位クラス）で使用されている教材よりも難しい、というようなこともあり得る。残念ながら習熟度別という利点を十分に活かしきれていない。

そこで、筆者たちは、本学英語教育の内容や方法、評価方法における具体的方針を定める必要があると感じ、2020年度に英語メジャーとしての「共同研究」に応募した。また、遠藤個人としても、2020年度に「教育改革推進事業」に応募した。本稿は、採択された両応募の研究内容をまとめたものである。

２．「共同研究」について

２．１　研究テーマ

「静岡英和学院大学における英語教育：学生の主体的学びを推し測るツールの開発」

２．２　研究目的

各学年での科目ごとの教育内容やそれぞれの達成目標を決め、本学英語教育のCan-do listを作

成し、それに基づいて行った学習成果を記録するためのポートフォリオの作成を行うことを目的とする。その際、学生にどのようなスキルを習得させることが必要かを慎重に考えていく。各学年での達成度は、5点スケールで評価する予定である。Can-do listやポートフォリオは、学生の英語学習における目的の達成状況を可視化できるツールであり、これらを利用すると、学生は自己学習の実践や過程を段階を追って振り返ることができ、英語学習に対する気づきや学びが促進されることになる。

Can-do listとは、CEFR[1)]（ヨーロッパ言語共通参照枠）の中にある、外国語の学習者・指導者・評価者が言語学習の到達度を同一の基準で判断できるように開発されたガイドラインである。2001年欧州評議会が設定したものには、例えばスキル（「読む」・「聞く」・「話す」・「書く」・「コミュニケーション」）ごとに到達可能な行動が6段階のCan-do Statements （リスト）で示されており、自律的・省察的成長を促すポートフォリオの形式を取り入れている。文部科学省の中央教育審議会（2016）をはじめ公表された文書にも、CEFRの共通参照レベルへの言及や、6段階の能力尺度（A1〜C2）を世界標準と認識していることが明記されている。

既に多くの大学英語教育でCan-do listは作成され活用されている。本学でも、本学が掲げるコンピテンシーを基に、そして、「静岡英和学院大学英語教育のための Can-do list の作成―本学における英語教育に関するニーズ調査」の結果・考察を参考にしながら、本学独自の英語教育のためのCan-do list を作成することが重要な課題であると認識している。

2．3　研究内容

本研究は、英語文化メジャーの専任教員全員で、合計約2カ年で行うことを予定している。以下が「共同研究」の申請書に記載した概要である。実際には、2020年度は、他大学の英語教育の調査しか実施できなかった。

1．各学年での英語教育のCan-do list作成のために本学の英語教育におけるニーズ調査を実施し、得られたデータの集計および考察を行ったうえで、パイロット的Can-do listを作成する。その際、他大学の英語教育におけるCan-do listも参照する。

2．パイロット的Can-do listを実際に授業で使ってもらう。

3．その後、パイロット的Can-do listの妥当性を検証して、Can-do listの精査（削除・追加・修正・統合）を行っていく。

4．研究成果を学会で口頭発表または学術論文の形で発表する。研究者からのフィードバックを得て、Can-do listを改良し、決定版を作成する。さらに、そのCan-do listをもとに、学習者が自らの学習達成度や自己学習の成果を記録し省察することを可能にするポートフォリオを作成する。そうすることで、学生を自律的な学習者とすることを目標とする。

2．4　調査内容

2020年度は、他大学でどのような英語教育が実施されているのかを調べるため、本学と偏差値が

類似している以下の大学34校へ、以下のアンケートを送付し、6校からの有効回答を得た。

＜アンケート送付先＞

偏差値 45

東日本国際大（経済経営）筑波学院大（経営情報）愛国学園大（人間文化）田園調布学園大（人間科）園田学園女子大（人間教育）関西国際大（心理） 姫路大（教育）奈良大（社会）東亜大（人間科）西南女学院大（人文）福岡女学院大（人文）宮崎国際大（国際教養）鹿児島国際大（経済）

偏差値 44

札幌学院大（経済経営）札幌国際大（人文）八戸学院大（地域経営）関東学園大（経済）城西国際大（観光）山梨英和大（人間文化）静岡福祉大（子ども）種智院大（人文）大阪人間科学大（心理）大阪人間科学大（人間科）姫路獨協大（人間社会学群）関西国際大（教育）高野山大（文）山陽学園大（地域マネジメント）四国学院大（社会）松山東雲女子大（人文科）尚絅大（現代文化）日本文理大（経営経済）志学館大（人間関係）沖縄大（人文）沖縄キリスト教学院大（人文）

＜アンケート内容＞

大学英語教育へのニーズ調査

貴大学で実施されている英語教育に関してどのようなことを扱っているのか以下お伺いしたく、ご回答して頂ければ幸いです。（複数回答可）

1．語彙力について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容　4）その他

2．文法・語法について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容　4）その他

3．リーディング力について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容

4）一文一文や行間に正確な意味の読み取り（精読）

5）段落構造を意識した長文の全体的内容の読み取り（パラグラフ・リーディング）

6）実用的な速度での全体的内容の読み取り（速読）　7）その他

4．リスニング力について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容

4）一語一語の正確な音の聞き取り 5）まとまった英文（または長文）の全体的内容の聞き取り　6）ネイティブが話す速度での全体的内容の聞き取り　7）その他

5．ライティング力について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容

4）一文一文を正確に書く 5）段落構造を意識した長文を書く（パラグラフ・ライティング）

6）その他

6．スピーキング力について

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容

4）一語一語を正確に発音する　5）スピーチ　6）ディスカッション　7）その他

7．コミュニケーション力について（上記１～６と重なるかもしれません）

1）口語・会話的な内容　2）説明的な内容　3）時事・社会的な内容

4）相手の立場に立って理解する力　5）自分の考えを明示する力

6）相手とのコミュニケーションを円滑に進める力　7）その他

8．異文化理解力について

1）異文化を理解する力　2）その他

9．英語検定試験について

1）英検　（ １級　準１級　２級　準２級　３級 ）

2）TOEIC （ 800点以上　700点台　600点台　500点台　400点台 ）

3）その他の資格試験

調査結果と考察は、４．で後述する。

３.「教育改革推進事業」について

３．１　研究テーマ

「英語教育におけるオンライン授業活用法－教育の質の担保を考える」

３．２　研究目的

本学の（専任・非常勤双方の）教員が、本学でどのような英語教育を実践し、学生に何を期待しているのかを明らかにする。

３．３　調査内容

本学で2020年度に英語科目を担当していた先生方と英語以外の科目を担当していた先生方の計32名に対し、上記２．４と同じアンケートを送付した。英語以外の科目として、例えば、日本語等の語学関連の授業や、将来学生が英語を使うとよいだろうと予測される内容を扱っている授業を選んだ。そのうち、英語科目を担当していた先生方４名、英語以外の科目を担当していた先生方12名から回答を得た。

4.　アンケート結果と考察

アンケートの回答結果は以下の通りである（複数回答有）。( ) 内の数字は、全回答数における実回答数の割合である。「その他」の具体的回答例は、表の後に示す。

	他大学	本学英語科目担当者	本学英語以外の科目担当者
1．語彙力			
1）　口語・会話的な内容	5（83%）	3（75%）	9（75%）
2）　説明的な内容	4（67%）	2（50%）	7（58%）
3）　時事・社会的な内容	4（67%）	2（50%）	6（50%）
2．文法・語法			
1）　口語・会話的な内容	5（83%）	2（50%）	6（50%）
2）　説明的な内容	4（67%）	2（50%）	5（42%）
3）　時事・社会的な内容	1（17%）	0	4（33%）
3．リーディング力			
1）　口語・会話的な内容	3（50%）	3（75%）	3（25%）
2）　説明的な内容	3（50%）	2（50%）	6（50%）
3）　時事・社会的な内容	5（83%）	0	7（58%）
4）　一文一文や行間に正確な意味の読み取り（精読）	5（83%）	2（50%）	2（17%）
5）　段落構造を意識した長文の全体的内容の読み取り（パラグラフ・リーディング）	3（50%）	2（50%）	6（50%）
6）　実用的な速度での全体的内容の読み取り（速読）	2（33%）	1（25%）	4（33%）
4．リスニング力			
1）　口語・会話的な内容	5（83%）	4（100%）	7（58%）
2）　説明的な内容	3（50%）	2（50%）	2（17%）
3）　時事・社会的な内容	5（83%）	1（25%）	4（33%）
4）　一語一語の正確な音の聞き取り	3（50%）	0	4（33%）
5）　まとまった英文（または長文）の全体的内容の聞き取り	2（33%）	1（25%）	8（67%）
6）　ネイティブが話す速度での全体的内容の聞き取り	3（50%）	2（50%）	3（25%）
5．ライティング力			
1）　口語・会話的な内容	3（50%）	2（50%）	2（17%）
2）　説明的な内容	3（50%）	2（50%）	8（67%）
3）　時事・社会的な内容	3（50%）	1（25%）	5（42%）
4）　一文一文を正確に書く	3（50%）	2（50%）	4（33%）
5）　段落構造を意識した長文を書く（パラグラフ・ライティング）	3（50%）	1（25%）	3（25%）

6．スピーキング力			
1)　口語・会話的な内容	6（100%）	4（100%）	8（67%）
2)　説明的な内容	3（50%）	2（50%）	7（58%）
3)　時事・社会的な内容	4（67%）	1（25%）	4（33%）
4)　一語一語正確に発音する	3（50%）	0	2（17%）
5)　スピーチ	3（50%）	1（25%）	4（33%）
6)　ディスカッション	4（67%）	1（25%）	4（33%）
7．コミュニケーション力			
1)　口語・会話的な内容	6（100%）	3（75%）	7（58%）
2)　説明的な内容	2（33%）	0	3（25%）
3)　時事・社会的な内容	3（50%）	0	4（33%）
4)　相手の立場に立って理解する力	4（67%）	2（50%）	6（50%）
5)　自分の考えを明示する力	4（67%）	3（75%）	7（58%）
6)　相手とのコミュニケーションを円滑に進める力	3（50%）	1（25%）	6（50%）
8．異文化理解力			
1)　異文化を理解する力	6（100%）	4（100%）	9（75%）
9．英語検定試験について			
1)　英検　1級	1（17%）	0	0
準1級	1（17%）	1（25%）	3（25%）
2級	4（67%）	2（50%）	6（50%）
準2級	1（17%）	2（50%）	1（8%）
3級	1（17%）	2（50%）	0
2)　TOEIC　700点台	1（17%）	0	2（17%）
600点台	3（50%）	2（50%）	3（25%）
500点台	3（50%）	2（50%）	1（8%）
400点台	1（17%）	1（25%）	2（17%）

＜その他＞の具体的回答例

1．語彙力について

他大学の場合：「テキストの重要語句の発音記号・アクセント・品詞・派生語等の解説。福祉については、主要な専門用語も紹介・解説する。」

2．文法・語法について

他大学の場合：「テキストの設問による問題演習」

本学の場合：「多くの一年生には、基礎的な文法用語」

3．リーディング力について

他大学の場合：「キーワードの空所補充による英文和訳」

本学の場合：「やはり就職に直結し、目標としやすい TOEICを意識して」

4．リスニング力について

他大学の場合：「やさしい英語を繰り返し」「空所補充によるディクテーション」

本学の場合：「やはり就職に直結し、目標としやすい TOEICを意識して」

5．ライティング力について

他大学の場合：「基本的な文型を正確に 」「空所補充・並べ替えによる和文英訳」

6．スピーキング力について

他大学の場合：「会話テキストの発音部分を一文ずつ教員の後のコーラス・リーディング」

回答に協力してくれた他大学の英語教育に関して見る限りでは、実施している英語教育において、「口語・会話的な内容」が多く扱われていると言ってもよいだろう。また、「時事・社会的な内容」も扱われていた。「異文化理解力」に関しては、全ての大学が「異文化を理解する力」が必要だと回答した。今回は回答数が少ないため、結果の一般化はできないが、本学の英語教育の指針を策定するのに有効なデータの一部となった。

本学の教員に対して行ったアンケート結果からは、各教員は本学の学生に対して、やはり「口語・会話的な内容」を扱える英語力は少なくとも必要だと思っていると言ってもよいだろう。一方で、「説明的な内容」や「時事・社会的な内容」に関しては、あまり必要だと思われていないという結果が出た。筆者個人としては、本当は「説明的な内容」や「時事・社会的な内容」を扱うことは必要だとは思っているが、学生の英語力を考えると扱うことは容易ではないと考える。「異文化理解力」に関しては、大多数の先生方が「異文化を理解する力」が必要だと回答した。ここでも今回は回答数が十分でないため、結果の一般化はできないが、今回のアンケート調査結果は、本学の英語教育の指針を策定するのに有効なデータの一部となった。これらの結果・考察を参考にしながら、学生の主体的学びをサポートできるような英語教育の指針を策定する必要がある。それと同時に、「時事・社会的な内容」を理解できるようになるまで学生の英語力を上げることも喫緊の課題である。

5．おわりに

「教育改革推進事業」に応募した当初は、研究テーマを「英語教育におけるオンライン授業活用法－教育の質の担保を考える」とし、本学教員に「本学における英語のオンライン授業の活用法」に関するアンケートを実施しようと考えていた。しかしながら、「共同研究」として他大学へ実施したアンケート調査の回収率が予想以上に低かったため、本学教員にも、他大学へ依頼したアンケートと同一のアンケートを実施することにした。そのようなわけで、「教育改革推進事業」の内容は、「英語教育におけるオンライン授業活用法－教育の質の担保を考える」という当初のテーマとは少

し異なるものとなってしまったが、本学の英語教育の指針を策定する上でより多くのデータを必要とするという点からは有意義であったと言える。

また、英語メジャーで申請した「共同研究」も、当初の計画通りには進まなかったが、2021年度でも英語メジャーとしての「共同研究」を引き続き申請し採択されたため、なるべく早く本学の英語教育の具体的指針を策定できるように研究を進めなければならない。そのためには、2021年度は更に多くの他大学へのアンケート調査を実施すると同時に、本学学生からの「英語教育のニーズ調査」も実施する必要がある。学生の実情とあまりにかけ離れた英語教育を行うのも良くないが、本学の学生が自律的態度を持って将来グローバル社会に適用できるような英語教育を考えていくのも、教員側の喫緊の課題だと思う。

注

１）「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR: Common European Framework of Reference for Languages)」とは、言語の枠や国境を越えて、異なる試験を相互に比較することを可能にする国際標準であり、外国語の熟達度を A1、A2 、B1、B2、C1、C2 の 6 段階に分けて説明している。この等級は、その言語を使って「具体的に何ができるか」という形で言語力を表「can-do descriptor」を用いて分かりやすく示しており、外国語の熟達度を表す CEFR の等級には、コミュニケーションの状況や話題、タスク、目的に関する分析のほか、コミュニケーションに用いられる能力について等級別の解説も記載されていることから、外国語学習のカリキュラムプランニングをする際の基準として、近年日本でも広く導入されている。

参考文献

坂田直樹・田中恵理他. 2015.「Can-do Statements を利用した医学英語教育ニーズの分析：医学部教員へのアンケート結果について」Journal of Medical English Education I (14). 15-24.

高橋良子. 2015. 「医学英語CAN-DOリストの開発」『「英検」研究助成報告』27. 217-228.

吉田茂・大橋利枝. 2004. 『外国語教育（2）外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』　朝日出版.

参考ウェブサイト

CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, ヨーロッパ言語共通参照枠）によって示されたCan-do一覧（日本語対照版、PDF）Retrieved October 24, 2021, from https://jfstandard.jp/top/ja/render.do

Council of Europe Language Policy Division によるCEFRに関する情報（英語版）Retrieved October 24, 2021, from http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/CADRE_EN.asp